

宋基燦著

『「語られないもの」としての朝鮮学校 在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』

岩波書店, 2012 年

1. 本書の意義

本書で取り上げられている朝鮮学校は、在日コリアンの子どもたちの民族教育のために日本国内に設立された外国人学校である。国内の外国人学校には、朝鮮学校以外にも韓国学校、中華学校、ブラジル人学校などがあるが、朝鮮学校の設立は1947年（前身の国語講習所は1945年設立）、初級学校、中級学校、高級学校を含めると全国に120校余りあり、学生数も約1万1000人と、日本で最も歴史があり、かつ規模の大きい外国人学校である。

歴史的に北朝鮮国家と強いつながりをもつ朝鮮学校は、日朝関係の歴史に翻弄されてきた。特に2000年以降は、核実験、ミサイル発射、拉致問題など日朝間の摩擦が激化するたびに、朝鮮学校や朝鮮学校生への嫌がらせ事件が頻発してきた。2010年から始まった高校授業料の無償化についても、朝鮮学校への適用をめぐるのは、日朝関係の現状に配慮し、文科省は適用を先送りしている。

このように日朝関係がリアルに投影された朝鮮学校は、北朝鮮という国家の対日政策を解明する上でも、日本政府の在日コリアン政策を理解する上でも、また在日コリアンの民族教育の実態を解明する上でも重要な研究テーマであったにもかかわらず、日本の学会では小沢有作氏の業績を除けば、本格的な研究は行われてこなかった。

本書は、人類学を専攻する韓国人の著者が、2001年から3年間に渡って大阪の朝鮮学校で行った度重なる参与観察とフィールドワークを基に朝鮮学校における民族教育の実態に迫った労作である。このようなことを書くと、またありふれた参与観察とフィールドワークかと思う読者がいるかもしれない。だが、韓国からやってきた筆者が、

北朝鮮やその下部組織である朝鮮総連の影響下にある朝鮮学校で長期にわたる参与観察を行うことは、たいへん勇気がいる行動であり、同時にそこにいる人々と信頼関係を築くことはたいへんしんどい作業であると想像される。南北分断後、北朝鮮と対峙してきた韓国には、ながらく「国家保安法」というものが存在し、その法律には「韓国の国民が北朝鮮の関係者と会合を持つことを禁ずる条項」（本書、23ページ）があり、筆者が朝鮮学校を訪問するのは同法に抵触する危険性があったからだ。金大中政権下の太陽政策で、韓国人と北朝鮮の人々との接触はかなり緩和されたといえ、筆者が韓国人研究者として禁断の学問領域に飛び込んだことは間違いない。

2. 民族学級の功罪

本書の考察の対象は、朝鮮学校における民族教育だけではない。第1章「民族教育の光と影」では、日本の公立小中学校で実施されてきた「民族学級」における民族教育について興味深い考察が行われている。

在日コリアンの多い大阪を中心に日本の公立小中学校で放課後に実施されてきた「民族学級」では、在日コリアンの子どもたちが週1回集まって、本名（民族名）使用の大切さや、簡単な韓国語での挨拶、朝鮮舞踊などを学ぶ。その目的は、通名（日本名）を名乗って、民族的出自を隠して通学している在日コリアンの子どもたちに「朝鮮人・韓国人として誇りをもって生きていく」力を養うことである。

在日コリアンの2世・3世の多くは、日本社会の激しい民族差別の中で、朝鮮人や韓国人であるという民族主体性を否定され、「日本人」の仮面

を被って生きることを余儀なくされてきた。こうした日本社会からの同化の圧力に対抗していくためには、日本名ではなく本名（民族名）を名乗り、失われた母国語を学ぶことで、はじめて負の意識を克服し、まっとうな人間として生きていける。こういった考え方の下に、「民族学級」では日本人との「『区別』に基づく『誇り』の創出」（本書、73 ページ）を目指すアイデンティティ・ポリティクス型の民族教育が展開されてきた。

だが、「奪われたものを取り戻す」民族学級での本名や国籍・母国語重視の民族教育も、日本社会の国際化にしたがって在日コリアンを取り巻く民族境界の地形図が急速に変化する中、深刻な危機に直面していると、筆者は主張する。日本籍コリアンの増加、父母両系を認めた国籍法の改訂、日韓ダブルの増加などによって、これまでの民族学級が模範としてきた在日コリアンの範疇にはおさまりきれない人々が数多く出現しはじめたからである。

筆者は「在日コリアンの児童たちに、自分のルーツを知り、それに対する自負心を持つこと」を民族学校は要求してきたが、こうした「アイデンティティ・ポリティクスとしての民族教育は、民族運動内部における『民族』概念の『ズレ』を認めない限り、多様な『個人』を抑圧する共同体主義の暴力に堕してしまう」（本書、108 ページ）と、従来の「民族学級」型民族教育の限界性を指摘する。

3. 朝鮮学校の可能性

では、「日本社会の都合を優先する多文化共生教育に回収されずに、共同体主義をうまくかわしながら、ある程度の能動性のある主体の可能性を見いだす」民族教育の場はないのだろうか。そうした可能性をもつ民族教育の舞台こそ朝鮮学校であると、筆者は言う。第2章「朝鮮学校という空間」、3章「実践共同体としての朝鮮学校」では、朝鮮学校における参与観察とフィールドワークを通じて、これまでよくわからなかった朝鮮学校における民族教育の実態やそこで学ぶ在日コリアン児童のしたたかな生き方が描かれている。朝鮮学校には、多くの読者が想定するように「時代遅れの国家主義に基づいた教育現場、硬直性に満ちた古い教育、なにより北朝鮮の思想を生徒に教え込

む恐ろしい所」という印象がある。しかし、実際に朝鮮学校の教育現場に入って観察してみると、「そのような国家主義の言説は外部からの視線とは違う方向に機能している」（本書、147 ページ）と、筆者は指摘する。

筆者は、その一例として朝鮮学校における徹底した朝鮮語教育とそれに対する生徒たちの柔軟な対応をあげている。朝鮮学校では、学校内では許された講義を除き、朝鮮語以外の言語は使用しないことを徹底するために、「指摘事業」と呼ばれる相互監視システムが導入されている。生徒はお互いの言語を監視し、友人から指摘を受けた日本語は紙に書かれて「ゴミ箱」に入れられる。このとき、朝鮮学校の生徒はお互いの日本語使用を激しく批判する。しかし、校門を出るや彼らの会話は一転、日本語モードに変わり、批判しあった仲間との友情関係は回復する。

筆者は、朝鮮学校の内と外での日常言語の価値分裂という矛盾を、朝鮮学校の生徒たちがそれぞれの舞台での「演技」を通じてしなやかに乗り切る術を身につけていることを、参与観察を通じて発見する。名前もまた同様である。朝鮮学校と学校外の日常という二つの舞台の上で、彼らは民族名と通名（日本名）を巧みに使い分けているという。実際、多くの朝鮮学校の生徒・卒業生と接してきた評者も、彼らの多くが、こうした二重性を否定せず、むしろそこからもたらされる矛盾を楽しんでいるようにみえるときもある。こうした「二律背反の共存」こそ、朝鮮学校という実践共同体の特質であり、そこで育まれた「主体のアイデンティティ・マネジメント」力（本書、229 ページ）に、筆者は民族教育の新たな可能性を見い出すのである。

4. 民族教育における自由主義と共同体主義のジレンマ

朝鮮学校における独自の民族教育はどのように行われているのか。筆者の参与観察から得られた発見には、朝鮮学校内部の人間にしかわからない「民族実践のメカニズム」が数多く紹介されている。規律としての「朝鮮語 100%生活化運動」、女子学生の制服であるチマチョゴリへの生徒たちのこだわり、「首領」・「指導者」の肖像画の意味、

組織としての少年団の役割、集団歌の働き、民族教育の成果を見せる場としての運動会や芸術公演の機能など、本書には、朝鮮学校の生徒たちが「民族」を「身体化」していく民族教育の実践過程がリアルに描かれており、民族教育に関心をもつ読者にはたいへん勉強になった。

ただ、本書で最も重要な論点は、おそらく民族教育をめぐる自由主義（リベラリズム）と共同体主義（コミュニタリアニズム）のジレンマという課題であろう。筆者は、「アイデンティティ・ポリティクスとしての民族教育は、民族運動内部における『民族』概念の『ズレ』を認めない限り、多様な『個人』を抑圧する共同体主義の暴力に堕してしまう。しかしだからと言ってその『ズレ』を認め、それに従った戦略変更を実践するならば、マイノリティの防衛というアイデンティティ・ポリティクスの武装解除に繋がりがかねない」（本書、108 ページ）と述べ、民族教育における自由主義と共同体主義のジレンマに切り込んでいる。

実際、在日コリアンの民族運動において硬直的な民族アイデンティティが過度に強調されてきた結果、日本籍を取得する在日コリアン、ダブルなどに対する差別と排除が生まれ、共同体主義の行き過ぎを指摘する声も少なくない。その一方、公立学校の民族学級で展開されている多文化共生の民族教育は、自由主義に基づく多民族共生を志向するあまり、民族教育内部の共同体要素を廃棄した結果、日本社会の共同体イデオロギーを逆に強化しているとし、民族教育現場における共同体主義が崩壊の危機に直面していると筆者は指摘している（本書、103～105 ページ）。

そうした状況の中で、筆者は、朝鮮学校という特殊な民族教育空間で培われた、「アイデンティティを本質化することなく、だからといって、解体することなく、綱渡りをするように上手く均衡をとりながら、この世（システム）を渡っていく、『主体のアイデンティティ・マネージメント』」（本書、229 ページ）に民族教育が直面してきた矛盾解決の糸口があるという。

しかし、朝鮮学校という特殊かつ限られた時間空間で培われた「主体のアイデンティティ・マネージメント」力は、彼らが卒業後、「レイシズム的な暴力が再生産され続けている」日本社会に放り

出されたとき、どうなるのか。「二律背反が共存する」学校や教室ではなく、長い人生の大半をしめる職場や労働の現場のなかで、彼らのアイデンティティ・マネージメント力は、日本社会に残存する植民主義の支配力に抵抗する力をもちえるのか。彼らの卒業後の生き方が気になるところである。

5. 本書への疑問

最後に一点、筆者の「民族学級型民族教育」批判には違和感を感じた。なぜ「自分のルーツに対する自負心」がなぜ「日本人のイメージ」を超えなければならないのか、よくわからない。在日コリアンの未来には、①日本国籍を取得して、日本人として生きる、②日本国籍を取得しても、コリア系日本人として生きる、③韓国・朝鮮籍のまま在日コリアンとして生きるなど、多様な選択肢があり、その方向性を選択するのは、彼らの自由であるからだ。ただし、そうした選択の自由が保障されるのは、自らのルーツや民族名にこだわって生きるコリア系日本人や韓国・朝鮮籍を持って生きようとする在日コリアンに不利益がかからないことが、前提条件である。

在日コリアンが多様化する今日、「日本籍を取得しつつも、民族名やダブル・ネームを名乗ったり、民族的ルーツを大切にする」行為などは、彼らが厳しい日本社会を生き抜いていく上での「アイデンティティ・ポリティクス」の一つであろう。また、厳しい社会状況にある在日コリアンが、生きるための選択肢として自ら主体的に日本名を名乗ることも、日本国籍を取得することも、「柔軟なアイデンティティ」として認める寛容さが在日コリアン社会にも求められている。そして同時に、在日コリアンが民族名を名乗っても、韓国・朝鮮籍を維持しても、民族的ルーツを隠さないでも、不利益を受けない社会システムを構築していく寛大さが、日本人にも問われているのではないだろうか。本書は、朝鮮学校の可能性とともに、民族教育とは何か、多文化共生教育とは何かを、改めて読者に問い掛けている。本書をきっかけに、そうした論争がさらに発展していくことを、期待したい。

（朴一 大阪市立大学）